

Title	「懐徳堂印存」の成立
Author(s)	草野, 友子
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2007, 41, p. 17-31
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/4874
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

『懷德堂印存』の成立

草野友子

はじめに

『懷德堂印存』とは、中井竹山から中井桐園までの懷德堂先賢の印影を集めたものである。大阪大学附屬図書館の懷德堂文庫には、『懷德堂印存』と、多数の印の実物とが収蔵されており、現在調査が進められている。

『懷德堂印存』には、三種類のテキストがある。一つは、大正元年（一九一二年）、懷德堂記念会から刊行された線装本二冊（以下、二冊本と称す）である。もう一つは、昭和十五年（一九四〇）、野内丘外編として刊行された同名の書である。これは、二冊本よりもさらに完備した印譜を目指したもので、線装本三冊（以下、三冊本と称す）と、七冊（以下、七冊本と称す）とがある。¹⁾

これまでの『懷德堂印存』に関する研究としては、まず、湯淺邦弘「懷德堂文庫資料解題（11）」（湯淺邦弘編『懷德堂文庫の研究2005』、大阪大学大学院文学研究科、二〇〇五年、六―八頁）において、湯淺氏が三冊本に関する詳細な解説を記している。また、湯淺氏は、『懷德堂の小宇宙——懷德堂印の研究——』（『中国学の十字路』（加地伸行博士古稀記念論集）、研文出版、二〇〇六年）において、中井竹山から中井桐園に至るまでの印章について、

基礎的な検討を加えており、印影という小世界の中から懷徳堂の歴史を辿っている。

さらに、「懷徳堂印存」所収の印影と、懷徳堂文庫に収蔵されている実際の印章とを照合させ、その印文・印紐等について解説を施したものととして、「懷徳堂の印章」(湯浅邦弘編、大阪大学大学院文学研究科、二〇〇七年)がある。本書の刊行に際し、筆者はその執筆及び編集担当を務めた。そして、その編集作業の際に、「懷徳堂印存」の成立に関わる重要な問題を発見するに至った。それは、「懷徳堂印存」三冊本の巻数に関する問題である。

これまで、三冊本の順序は、下小口に墨書されている巻数によって、第一巻が中井竹山の印影、第二巻が中井履軒・中井柚園の印影、第三巻が中井蕉園・中井碩果・中井桐園の印影、という順序であると考えられてきた。ところが、各巻の内容を精査したところ、履軒・柚園の印影が収録されている第二巻と、蕉園・碩果・桐園の印影が収録されている第三巻とは、実は順序が逆である可能性が浮上してきた。つまり、三冊本は本来、第一巻が竹山の印影、第二巻が蕉園・碩果・桐園の印影、第三巻が履軒・柚園の印影、という順序であった可能性が考えられるのである。それでは、こうした配列には何らかの意図があったのであろうか。また、本来の順序が何故誤解されるに至ったのか。

一、「懷徳堂印存」の書誌情報

そこで、まず、「懷徳堂印存」の中でも最も古い成立である二冊本について、その書誌情報を確認したい。

二冊本は、大正元年(一九一二年)に懷徳堂記念会が、中井竹山・履軒の曾孫である中井木菟麻呂から中井家の印章を借りて印譜を作成し、線装本二冊として百部限定で刊行したものである。そこには、竹山八十三か類、履軒六

十三顆、蕉園十七顆、碩果四顆、袖園十七顆、桐園四十二顆の印影が収められている。^③ 印影は、一葉につき數顆が押印されている。卷末には、西村天囚の跋文（明治四十五年五月）、及び中井木菟麻呂の跋文（大正紀元仲秋）が附されている。また、書帙の内側には、中井木菟麻呂による「附言」（明治壬子首春。各人物毎の解説）が貼付されている。

「懷徳堂所蔵 懷徳堂先賢著述書目」（「懷徳」十九号、懷徳堂記念会、一九四一年、四二〜四三頁）には、次のようにある。

一五四 懷徳堂印存 懷徳堂記念会編 二冊一帙

是は明治四十四年懷徳堂先哲祭の際、有志相謀りて、中井黄裳先生保存に係る竹山、履軒、蕉園、碩果、袖園、桐園六先生の印章を借り、百部を限りて其の印譜を製したものである。帙内に黄裳先生が附言と題して、先賢中三宅万年先生は終世印章を用ひず、斃庵、蘭洲、春楼蓋し各々數顆あらんも、散亡して伝はらず、故に懷徳堂の遺印は竹山を以て首とする、而して今存するものは、竹山の印章八十四顆、履軒五十四顆、蕉園十六顆、碩果四顆、袖園十七顆、桐園三十顆であると記されて居る、卷末に西村碩園先生、及び黄裳先生の跋文が附してある。

これは、西村天囚による跋文と、中井木菟麻呂による附言とを基に書かれたものであると見られるが、「懷徳堂印存」二冊本の詳細を端的にまとめている。この二冊本では、印影の順序は、第一巻が竹山、第二巻が履軒・蕉園・碩果・袖園・桐園というように、年代順に配列されている。

では、次に、三冊本・七冊本の書誌情報を確認してみよう。

「懷徳堂印存」三冊本・七冊本は、昭和十五年（一九四〇）一月十二日、野内丘外編として刊行された。本書は、「懷徳堂」三字の印など散逸して中井家に伝わらなかつた印を、諸資料の印影を参考にして模刻するなど、より完備した印譜を目指して作られたものである。

印影の部分は、基本的に二冊本と同様であるが、個々の印影の配列は、二冊本と大きく異なる。印影数は、竹山九十二顆、履軒六十八顆、袖園二十二顆、蕉園十七顆、碩果四顆、桐園四十二顆であり、二冊本と比べて増加している。また、大正本では、印影に関する注記は見られなかつたが、昭和本では、「前川虚舟刻」「曾之唯刻」「高播皮美篆刻」といった篆刻者情報、「陶印」「銅印」「水晶印」といった材質情報、「両面印」「連印」「子母印」といった形態情報などが新たに附記されている場合がある。

編者の野内丘外とは、名を芳藏と言い、同風印社の同人で、住友家史編纂係であつた人物である。「懷徳堂印存」の刊行には、当時の住友理事長、小倉正恒の貢献が背景にある。⁽⁶⁾

「懷徳堂所蔵 懷徳堂先賢著述書目」（前掲書、四三頁）には、次のように記載されている。

一五五 懷徳堂印存 野内丘外君編 三冊一帙

右は昭和十四年三月住友の野内丘外君が中井家より遺印を借り、五十部を限り追押されたものである、同君は同風印社の同人で篆刻に巧みなるより、題箋扉等の文字、及び黒印等自ら刀を執り、また前記印存の足らざるを補ひ、完備したる印譜としたもので、装釘は七冊本と三冊本との二種ある、巻首に押せる「懷徳堂」三字印は、

散佚して中井家に伝はらないものであるが、同君は書物に押捺せる印影より新に模刻された、而して是の書作製と共に他の自刻のものを併せ悉く本堂に寄贈された、茲に其の勞苦と厚意とに對し、感謝する次第である。

なお、七冊本は、重建懷徳堂で講師を務めた大江文城の書き入れが見られる貴重な資料であり、全体の構成を各人物毎に七冊に分割している。七冊本の「竹山先生印影」については、印影の配列が途中から三冊本と大きく異なっている。また、七冊本の「袖園先生印影」は、一顆の印影を欠く。これらのことを除けば、印影数は三冊本と同様である。よって、本論では、三冊本と七冊本を基本的に同書と見なして、以下、考察を進めていきたい。

それでは、「懷徳堂印存」三冊本の大概を示しておきたい。三冊本は、まずはじめに、模刻された「懷徳堂」三字の印が押印され、次に、扉として「懷徳堂印存」(狩野直喜氏の揮毫による)と記されている。そして、大正本では巻末に附されていた西村天囚の跋文を序文として掲げ、続いて、「昭和十四年之冬」の木菟麻呂の序文「後懷徳堂印存序」を掲げている。二冊本では書帙内側に貼付され、各人物の解説を列記していた木菟麻呂の「附言」は、昭和本では各人物毎に冒頭に附され、その後その人物の印影が列挙されていくという形式になっている。

「懷徳堂印存」そのものには、巻数を示す記載が一切ない。そこで、従来、三冊本の配列順序は、下小口に墨書されている巻数によって、竹山(第一巻)、履軒・袖園(第二巻)、蕉園・碩果・桐園(第三巻)であるとされてきた。ところが、これまで第二巻と見られていた履軒・袖園の巻の末尾に中井木菟麻呂による跋文「書懷徳堂印存後」(大正紀元仲秋。二冊本の跋文と同じもの)があり、さらに「編者識」(編者による本書についての注記)として次の記載がある。(なお、()内は、本文に沿って筆者が現代語訳したものである。)

一、旧懷徳堂有堂号三字石印尾藩石樵子所刻散逸不存今擬旧譜摹刻卷首所掲是也

(旧懷徳堂には、尾張藩の中西石樵による「懷徳堂」三字の堂名を刻んだ石印があったが、散逸して伝わらず、今、旧印譜によって模刻した。卷首に掲げられているのがこれである。)

二、編中刻者名号扱中井氏旧印譜不録印材者縁為石印

(編中に記す篆刻者名は、中井氏の旧印譜の記載に基づく。印材を記していないのは全て石印である。)

この記載は、明らかに本巻が末巻であることを示している。つまり、三冊本は本来、竹山(第一巻)、蕉園・碩果・桐園(第二巻)、履軒・柚園(第三巻)という順序であつて、三冊本の下小口に墨書されている巻数は、正確ではないのである。この巻数の記載は、後人の手によるものであると見られ、おそらく大正本の配列に影響を受け、竹山の印影の後は履軒の印影という先入観があつたために、誤つて書かれたのであろう。

この下小口の巻数がいつ墨書されたのかは定かではないが、少なくとも、大阪大学附属図書館が正式に受け入れた昭和二十六年(一九五二)九月十日にはすでに書かれていたものであると見られる。なぜなら、図書館の受入番号が、竹山巻が「33167」、履軒巻が「33168」、蕉園巻が「33169」という順序になつており、この番号は、すでにあつた下小口の墨書に従つて書かれたものと考えられるからである。

それでは、なぜ三冊本は、年代順に配列している二冊本と異なり、このような配列になつたのであろうか。次章では、それについて検討してみたい。

二、「懷徳堂印存」と「後水説館記」

『懷徳堂印存』三冊本は、第一巻が中井竹山の印影、第二巻が竹山の子である蕉園・碩果・桐園⁽¹⁾の印影、第三巻が中井履軒とその子である袖園の印影、という分類になっており、二冊本のように年代順にはなっていない。では、三冊本がこのような配列とされた背景は、どういったものであろうか。そこで、まず想起されるのは、懷徳堂の關係者と、懷徳堂から独立した中井履軒の私塾・水説館の關係者とを意識的に分けているのではないか、ということである。

この点を解明するための重要な手がかりがある。それは、懷徳堂文庫の一つである新田文庫⁽²⁾に収蔵されている中井木菟麻呂の日記である。

中井木菟麻呂は、中井桐園の長男で、中井竹山・履軒の曾孫に当たる。号は天生・黄裳。安政二年（一八五五）に懷徳堂内で生まれ、十四才で懷徳堂の閉校を迎える。その後、木菟麻呂は中井家宗家を継ぐものとして、中井家伝来の書籍などの保存、懷徳堂関係資料の蒐集、懷徳堂学舎の再建に努めた。重建懷徳堂が設立された後は、昭和七年（一九三二）と昭和十四年（一九三九）の二度にわたって中井家伝来の懷徳堂関係資料を懷徳堂記念会に寄贈した⁽³⁾。木菟麻呂は、旧懷徳堂と重建懷徳堂とを共に知る人物として、また、旧懷徳堂や水説館の遺書遺物の継承という点で、極めて重要な役割を果たした⁽⁴⁾。なお、木菟麻呂は、敬虔なロシア正教徒でもあり、ニコライ大主教を助けて聖書の翻訳に尽力した人物でもあった。昭和十八年（一九四三）三月二十五日、八十九歳でその生涯を終えた⁽⁵⁾。

このような人物であつた木菟麻呂は、明治二十八年（一八九五）から昭和十八年（一九四三）にかけて、膨大な日記を残している。¹⁶ 日記には、その日の天気や、どんなことがあつたか、誰と会つたか、どのような仕事をしたか、何を食したか等、まさに木菟麻呂の日常生活が綴られている。その中の一つ、「後水哉館記」（全九巻）は、昭和十四年（一九三九）四月五日から木菟麻呂が亡くなる直前の昭和十八年（一九四三）三月二十日までの日記であり、ここには「懷徳堂印存」昭和本の編纂当時の状況が詳細に記されている。

例えば、「昭和十四年己卯四月起」（第一巻）を見ると、六月十一日には「懷徳堂印存序起草」と記し、同十三日には「懷徳堂印存序を作る」とある。また、十月二十二日には、野内丘外氏が木菟麻呂の元を訪れた際、木菟麻呂は野内氏に「懷徳堂遺編」「水哉館遺編」の黄銅印二顆など計四顆を貸与したという記述もある。さらに、十月末から十一月初めにかけては、「懷徳堂印存」の附言を浄写したことや、題簽六枚が完成したこと等を記載している。このように、「後水哉館記」には、木菟麻呂が「懷徳堂印存」昭和本の序文を書いた当時のことや、野内丘外氏が度々、木菟麻呂の元を訪ねていたこと等についても鮮明に書かれているのである。

中でも、特に注目されるのは、「昭和十四年己卯七月起」（第二巻）、十一月八日の記載である。

午後野内芳蔵氏来訪後懷徳堂印存の押印終りたる者一部を携え来りて見せられて之に付懷徳堂水哉館巻冊の分合を謀り一二押印の混入を直し又種々謀る所にあつた

ここには、野内氏が木菟麻呂の元を訪れた際、押印が終わつた「懷徳堂印存」を持参しており、それを見た木菟麻呂は、懷徳堂の巻と水哉館の巻とを分け、印が混入していたものを直した、ということが記されている。つまり、

三冊本は当初から、懷徳堂と水哉館とを意図的に区別して編纂されていたのである。

このように、昭和本の編纂には、木菟麻呂の意志が反映されている。一方、二冊本の編纂時には、木菟麻呂が関与した形跡が見られず、当時の木菟麻呂の日記「秋霧記」にもそれに関する記述はない。それは、二冊本が懷徳堂記念会によって編纂されたものであり、木菟麻呂の意見を取り入れて編纂されたものではなかったからだと考えられる。また、「懷徳堂印存」自体に葉数・巻数が書かれていないのは、事前に配列のことを考えていたためであるとも推測できる。そうであれば、前述のように、三冊本と七冊本の「竹山先生印影」の配列に違いがあることについても、こうした事情から生じたものである可能性が考えられよう。

三、中井木菟麻呂の悲願——懷徳堂と水哉館の再興——

では、なぜ中井木菟麻呂は、懷徳堂と水哉館とを意識的に区別しようとしたのであろうか。

それは、懷徳堂と水哉館の再興が木菟麻呂の悲願だったからである。木菟麻呂は、「重建懷徳堂意見」「重建水哉館意見」⁽¹⁷⁾を作成し、その当時の有力者、すなわち文部大臣や議員、新聞社に配布するなど、懷徳堂・水哉館を再建するために具体的な行動を起こしていた。

「重建懷徳堂意見」は、明治二十六年（一八九三）に作成された。これは、懷徳堂創立百七十年、寛政再建百年の年に当たる明治二十八年（一八九五）に、懷徳堂を再興しようとして記された意見書である。内容は、懷徳堂の略史に始まり、復興されるべき懷徳堂の姿について詳しく書かれている。また、学則として旧懷徳堂の「懷徳堂定約」を用いるとして、その要約も記されている。この意見書に書かれた計画自体は、後援者もなく挫折した。挫折

した原因については、木菟麻呂のキリスト教入信が大きな障害であったとされる。中井木菟麻呂は、「己巳殘愁録」〔懷徳〕十号、懷徳堂記念会、一九三二年、四四頁）において、当時の状況を、

余は孔教を尊崇すると共に基督正教を信奉して、教育上に特殊の意見を立て、基督正教を經となし、孔教を緯とするでなければ、完備なる教育は成立たない、今の世に当りて、孔教己を死守して、他を顧みないものは、孔道の本旨を得た者でない、といふ意見を持つてゐたので、所謂認識不足の人々には、之を容る、ほどの器量を具へてゐなかつたので、遂に実行不可能の事となつてしまつた。

と記している。ただし、その後、明治四十三年（一九一〇）の懷徳堂記念会の設立、大正二年（一九一三）の財団法人としての認可、そして、大正五年（一九一六）の重建懷徳堂の建立により、懷徳堂は再興を見るに至つた。

木菟麻呂はまた、水説館の再興をも思い続けており、「重建懷徳堂意見」と同時期に「重建水説館意見」を提出している。この意見書は、明治二十六年（一八九三）と大正十五年（一九二六）の二度、作成されている。明治版は、履軒入京の百三十年目の年に当たる明治二十八年（一八九五）に水説館を再興しようとして記されたものである。木菟麻呂の父桐園は、履軒の孫で水説館に生まれたが、宗家を継ぐことになり、懷徳堂に入ったため、水説館と懷徳堂とは事実上合併した形になつてしまつた。しかし、木菟麻呂は、水説館は独立した形で別に再興したいとの意欲を持ち続けていた。この意見書の明治版は、上巻では中井履軒を顕彰し、下巻では水説館を女子教育の場に当てるべきだとの意見を述べるといふ構成である。木菟麻呂は、懷徳堂を男子の教育の場とし、水説館を女子の教育の場としようと考えていた人物であつた。そして、この女学校を「水説館女学」と名づけ、そこでは徳育に重点

を置いて、識見のある女性を育成し、また書を読むことで女流文学が盛んになることをも期待していた。結局、この計画も、資金面などの問題が立ちばかり、挫折するに至ったが、女子教育に重点を置く点は、木菟麻呂の水哉館の再興計画の大きな特徴である。⁽¹⁸⁾

その後も木菟麻呂は、水哉館を女学校として再興したいという願望を持ち続けた。明治三十五年（一九〇二）に木菟麻呂の弟子でロシア正教徒の高橋五子^{いね}が創立した「京都正教女学校」を水哉館に見立てたり、同じ頃に木菟麻呂の妹である中井終子に東京の自宅で「楓幃女塾^{ふうい}」を開かせたりしたのは、その願望の表れであつたと見られる。⁽¹⁹⁾ また、大正十五年（一九二六）には、再び「重建水哉館意見」を記し、履軒の生誕二百年に当たる昭和六年（一九三一）に水哉館を再興しようとしたが、この計画もやはり実現しなかつた。⁽²⁰⁾ さらに、昭和十一年（一九三六）には、終子が自らが始めた私塾を「水哉館」と名づけたこともあつた。⁽²¹⁾ このように、中井木菟麻呂は、水哉館を女学校として再興したいという思いを、長きにわたり持ち続けていたのである。

以上のように、中井木菟麻呂は、懷徳堂と水哉館双方の再建を目指していた。結局、水哉館の再興は叶わなかつたが、「懷徳堂印存」昭和本において、懷徳堂と水哉館とが意図的に分けられているのは、こうした木菟麻呂の思いが「懷徳堂印存」の中にも如実に反映された結果であると言えよう。また、第三卷（実は、第二卷）の末尾に当たる桐園の印影の最後は「水哉館遺編」（図二）であり、懷徳堂・水哉館それぞれの締めくくりとしてこれらの印を選んでいるのも、そういった意図の表れであると考えられる。

おわりに

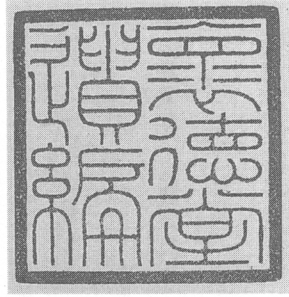


図1 「懐徳堂遺編」
大阪大学附属図書館
懐徳堂文庫所蔵

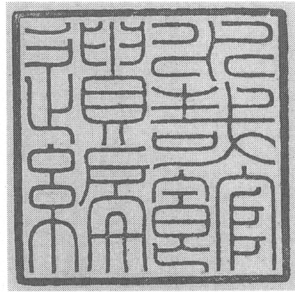


図2 「水哉館遺編」
大阪大学附属図書館
懐徳堂文庫所蔵

以上のように、「懐徳堂印存」三冊本に記載されている巻数は、後人の手によるもので、誤りであることが判明した。今後、「懐徳堂印存」三冊本を取り扱う際には、巻数に注意すべきである。⁽²²⁾ただし、この巻数の問題自体は、「懐徳堂印存」の価値を損なうものではなく、大変小さな問題である。しかし、その些細な問題の背後に注目したとき、懐徳堂と水哉館双方を再建しようという中井木菟麻呂の強い意志を感じ取ることができる。懐徳堂と水哉館の再興という木菟麻呂の大きな夢は、「懐徳堂印存」の中にも生き続けているのである。

注

(1) なお、本稿では便宜上、二冊本を大正本、三冊本・七冊本を合わせて昭和本とも称す。

- (2) 類は、印章の単位。
- (3) 連印は二面で一と計数し、両面印・子母印はそれぞれ別類として計数している。後に引用した「懷徳堂所蔵 懷徳堂先賢著述書目」に記載されている類の数と異なるのは、そのためであろう。
- (4) 「曩日、大阪土人相謀、校刊懷徳堂遺書、以祭諸儒之靈、又展親詩書畫、遂製印譜、以頌同好。所以景賢報徳者、可謂厚矣。(曩日、大阪土人相謀り、懷徳堂遺書を校刊して、以て諸儒の靈を祭り、又た詩書畫を展親し、遂に印譜を製りて、以て同好に頌かつ。賢を景^{おほ}ぎ徳に報ゆる所以なる者、厚しと謂うべし。)」
- なお、西村天因の序文は、「懷徳堂の印章」にその全文と解説が掲載されている(前掲書、六〇―六二頁)。
- (5) 「万年先生終世不用印章。莞庵・蘭洲・春樓三先生畫各有數類、散亡已久。故伝懷徳堂遺印以竹山先生為首焉。(万年先生終世印章を用いず。莞庵・蘭洲・春樓三先生畫し各おの數類有るも、散亡して已に久し。故に懷徳堂遺印を伝うるは竹山先生を以て首と為す。)」
- (6) 宮本又次「重建懷徳堂と経済人」、「大阪大学経済学」第一号、大阪大学経済学部、一九八二年、一三頁参照。
- (7) 書き入れは、ほとんどの場合、「石印方木紐」「扶桑木」「象紐」などの形状情報である。
- (8) 印影数が多い竹山のみ二巻、他の人物は一巻ずつ編纂されている。
- (9) このことは、湯浅氏前掲書、「懷徳堂の小字宙——懷徳堂印の研究——」において、すでに指摘されている。
- (10) なお、本書に付けられている付箋番号も同様であり、竹山巻「001097」、履軒巻「001098」、蕉園巻「001099」という順序になっている。
- (11) 中井桐圃は、履軒の子である中井袖園の子だが、竹山の子である碩果の養子となり、宗家を継いだ。
- (12) 新田文庫とは、大阪大学附属図書館所蔵の懷徳堂文庫を構成する文庫の一つで、昭和五十四年(一九七九)に木菟麻呂の妹である中井終子の養女、新田和子氏が寄贈した中井家関係資料のこと。
- (13) 詳細は、中井木菟麻呂「懷徳堂遺物寄進の記」(「懷徳」十一号、懷徳堂記念会、一九三三年)、吉田銳雄「懷徳堂水哉館遺書遺物目録」(「懷徳」十七号、懷徳堂記念会、一九三九年)に記録されている。
- (14) その経緯については、竹腰礼子「懷徳堂文庫を守った人——中井木菟麻呂翁の功績——」(「大阪あーかいぶず」、大阪府公文書館、一九九〇年)に詳しい。

- (15) 湯浅邦弘編著「懷徳堂事典」、大阪大学出版会、二〇〇一年、二〇〇～二〇一頁参照。
- (16) 新田文庫には、中井木菟麻呂の日記が多数あり、当時の状況を知る上で大変貴重な資料である。大阪大学附属図書館の懷徳堂文庫に収蔵されている木菟麻呂の日記は、次の通り。
- 「黄葉斎日記」(明治二十八年一月～同三十三年一月)、「秋霧記」(明治三十四年七月～大正三年十二月)、「鶴室記」(大正四年一月～同九年七月)、「吳江日録」(大正十年九月～同十四年三月)、「桜陵記」(大正十五年七月～昭和七年十月)、「桜谷記」(昭和七年十月～同十二年六月)、「薛荔窩記」(昭和十二年六月～同十四年四月)、「後水哉館記」(昭和十四年四月～同十八年三月)。
- (17) 「重建懷徳堂意見」「重建水哉館意見」の解題及び書誌情報については、佐野大介「懷徳堂文庫資料解題(21)」(湯浅邦弘編「懷徳堂文庫の研究2005」、大阪大学大学院文学研究科、二〇〇五年、一〇七頁～一〇九頁)に記載されている。
- (18) その詳細については、北崎豊二「中井木菟麻呂の水哉館再興計画——昭和初年の場合——」(「懷徳」六十八号、懷徳堂記念会、二〇〇〇年)参照。
- (19) 中村健之介・中村悦子「ニコライ堂の女性たち」、教文館、二〇〇三年、五五五頁参照。当時の状況については、本書に詳しく書かれている。
- (20) 北崎氏前掲書、二〇～二五頁参照。
- (21) この命名は、重建懷徳堂に対抗するように解されるとの忠告があったようであるが、終子は耳を貸さなかった。また、この私塾は、当時の時流に合わず、学校の予習復習のための塾になっていったようである。詳細については、中村氏前掲書、五〇五頁参照。
- (22) なお、これによって、巻数の記載がない七冊本の順序も、第一巻・第二巻が竹山、第三巻が蕉園、第四巻が碩果、第五巻が桐園、第六巻が履軒、第七巻が袖園であると確定できよう。袖園の巻には、やはり「編者識」がある。

(大学院博士後期課程学生)

摘要

《懷德堂印存》的成立

草野 友子

所謂《懷德堂印存》是指收藏，從中井竹山到中井桐園，懷德堂先賢的印影。現在，大阪大學附屬圖書館懷德堂文庫，收藏著大正元年出版的二冊（簡稱二冊本），昭和十五年出版的三冊（簡稱三冊本）、七冊（簡稱七冊本），及很多印章。

2007月出版的《懷德堂的印章》（湯淺邦弘編輯，大阪大學大學院文學研究科）是《懷德堂印存》的研究之一。此書，對照《懷德堂印存》所收的印影和實際使用過的印章，並調查了它的印文、印紐等。筆者擔任此書的執筆及編輯時，發現了關於《懷德堂印存》成立的問題。

也就是，《懷德堂印存》三冊本的卷數問題。至今為止，根據記載的卷數，《懷德堂印存》三冊本的順序，被認為是竹山（第一卷），履軒、柚園（第二卷），蕉園、碩果、桐園（第三卷）。但是，實際查閱此書的內容時，竹山（第一卷），蕉園、碩果、桐園（第二卷），履軒、柚園（第三卷）的順序為正確，而記載的卷數應為錯誤。

《懷德堂印存》三冊本編纂當時的狀況，我們可從中井木菟麻呂（中井竹山、中井履軒的曾孫）的日記【後水哉館記】裏確認。此日記中，詳細記錄著，《懷德堂印存》三冊本的編者野內丘外和木菟麻呂之間的談話。據此，我們可以知道《懷德堂印存》三冊本，是意圖性區別懷德堂和水哉館（中井履軒的私塾）之後，編纂而成。

那麼，為甚麼中井木菟麻呂要區別懷德堂和水哉館呢？我們可從〈重建懷德堂意見〉〈重建水哉館意見〉來了解。木菟麻呂曾為懷德堂和水哉館雙方的重建奔走過。

總上所述，筆者斷定《懷德堂印存》三冊本記載的卷數是由後人之手，屬於錯誤。並且，三冊本意圖性地區別懷德堂和水哉館，反映了中井木菟麻呂想重建雙方的意志。

キーワード：《懷德堂印存》，《後水哉館記》，懷德堂，水哉館，中井木菟麻呂